

なぜ英語が話せないの

< 8 >

「ゆとりある教育」を目指した」との批判も。授業一時間減た文部省の新学期指導要領で、の功罪が、あれこれ指摘される。中学校の英語授業は昨年度から、なか「入試は太丈夫か」という週二時間に減った。週一時間の父兄の不安も増幅している。

学力急落の批判も

大原中から報告 英語授業一時間減の波紋

短縮により、英語の教科書は十四課ぐらいたった内容を十二課程度に少なくなり、教える文法事項も精選して軽減。二年生で教えていた現在形否定形は三年の授業に回された。

水松隆子先生は、生徒から「教科書だけでなく、英会話や外国のいろいろな話も聞きたい」と言われて考え込んだ。

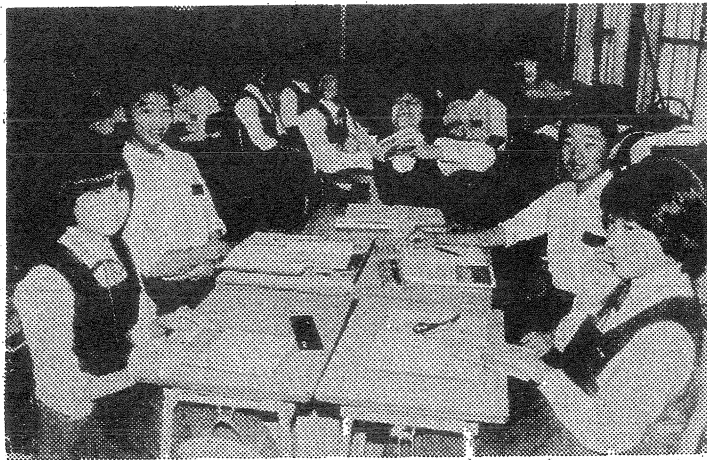
時間削減をめぐる波紋は大きかった。英語教師は、各地で反対署名運動などを実施。中学生を受け入れる高校教師からは「新入生の英語の学力が急落し

おまけに教師一人が受け持つ生徒数は、授業の短縮に伴い、逆に急増。生徒個人の實力把握やきめの細かい指導は、いっそ

小都市・大原中学でも四人のうち難になつている。例えば、今村先生の場合、かつて英語の授業が週五時間あつた時期には、四クラス二百六十人

「中、高校英語教師の八割は厳密に言えは英語が話せない」と福田昇八・熊本大学教授と指摘されるなかで、今村先生は福岡市へ毎週出かけ、西南大学のアメリカ人留学生から英会話を習った経験がある。また、英語教師を対象にした県教委の英

教育現場は、まさに難問山積だが、水松先生らがサジを投げている様子はない。それどころか「少しでも現状打破を」と驚くほど意欲的である。英語は、根拠よい継続性が要求される学問。なのに授業が一時間減つたうえ、学校の行事と重なって、英語授業が十日近くもないクラスが出る。生きた英語どころか、生徒は前の授業で語研修会にも出席している。授業の中で、電話のかけ方や簡単な日常会話の暗記などを活発に試みる。生徒には英語検定試験の受験を勧めめるが、「三、四級頼りたい」と真剣に考えている。水松先生らは、限られた授業



楽しい英語の授業にも入試英語の影響が… (大原中2年8組で)